

没後50年 高島野十郎 展

50 Years after His Passing

Takashima Yajuro

2026年7月4日(土)～9月6日(日)

前期:7月4日(土)～8月2日(日)／後期:8月4日(火)～9月6日(日)

※会期中、一部展示替えあり



【1】《満月》昭和38（1963）年頃
油彩・画布 東京大学医科学研究所蔵

展覧会概要

高島野十郎(1890-1975)は、福岡県出身の洋画家です。東京帝国大学(現・東京大学)農学部水産学科を首席で卒業しながらも画家の道を選び、独学で絵を学んだ野十郎は、特定の美術団体に属さず、流行や時代に迎合することなく、自らの理想と信念にひたすら忠実であろうとしました。晩年に千葉県柏市へ移る前の約50年、途中に留学や帰郷を挟みながらも東京の渋谷や青山にアトリエを構えていた、渋谷区にゆかりの深い人物でもあります。

没後50年を機に開催する本展は、初公開作品や青木繁、坂本繁二郎、岸田劉生など関連する作家の作品、関係資料を含めた約170点を展覧する、高島野十郎展としては最大規模の回顧展となります。「蠟燭」や「月」を主題とした代表作はもちろん、彼の芸術が形成されたルーツを遡り、自身のよりどころとしてきた仏教的思想を読み解きつつ、青年期や滞欧期の作品など、これまで大きく取り上げられなかった部分にも焦点を当てます。また、野十郎関係者による書簡やメモ等の資料から、彼がひとりの人間としてどのように生き、周囲とどのような関係を築いたのか、彼の人間像にも改めて迫ります。

「孤高の画家」と称されてきた高島野十郎の新たな全貌をお楽しみください。

展覧会の会期・開館時間・イベント等が変更・中止となる場合がございます。最新情報は当館HPまたはSNS等でご確認いただきますようお願いいたします。

開館時間

午前10時～午後6時(毎週金曜日は午後8時まで)

※入館は開館時間の30分前まで

入館料

一般1,000円(800円)、大学生800円(640円)、
高校生・60歳以上500円(400円)、小中学生100円(80円)

※()内は団体10名以上及び渋谷区民の入館料

※土・日曜日、祝休日及び夏休み期間中は小中学生無料

※毎週金曜日は渋谷区民無料

※障がい者及び付添の方1名は無料

休館日

月曜日(ただし7月20日は開館)、7月21日(火)、8月12日(水)

主催:渋谷区立松濤美術館、毎日新聞社

協賛:大和ハウス工業 協力:ブルーミング中西

展覧会公式HP: <https://takashimayajuro50.jp/>

会場 渋谷区立松濤美術館

〒150-0046 東京都渋谷区松濤2-14-14

電話:03-3465-9421 HP: <https://shoto-museum.jp>

交通案内

●京王井の頭線 神泉駅下車徒歩5分

●JR・東京メトロ・東急電鉄 渋谷駅下車徒歩15分

※駐車場はございません



【2】《絡子をかけたる自画像》
大正9（1920）年 油彩・画布
福岡県立美術館蔵

高島野十郎(本名・高嶋彌壽^{やじゅ})は、現在の福岡県久留米市の酒造家の五男として生まれました。名古屋の旧制第八高等学校(現・名古屋大学)を経て、東京帝国大学(現・東京大学)で学びます。大学時代から渋谷の地に住み、東京オリンピックに向けた首都改造計画を機に、70歳の時に千葉県柏市へ移住。水道も電気もない田園のなかに小さなアトリエを建て、晴耕雨描ともいえる生活を始め、昭和50(1975)年に85歳で亡くなりました。

兄・宇朗や兄の親友の青木繁らの影響もあり幼い頃から絵を描くことに熱中していました。大学を卒業して画家の道を選びますが、団体には属さず、個展のほかは公に絵を発表することはなかったため、彼の作品を知る人は知人友人の域を超えることはありませんでした。没後5年、昭和55(1980)年に福岡県文化会館(現・福岡県立美術館)で開催された展覧会「近代洋画と福岡県」に《すいれんの池》(広報画像【5】)が出品されたことで無名の画家であった野十郎に光が当てられ、その後の評価につながりました。

野十郎は静物や風景の精緻な写実を一貫して追求し、初期から晩年まで数多く描きました。彼の写実には独自の仏教的理念が含まれ、独特な視点や深みをもたらしています。

※作品はすべて高島野十郎作。掲載の際は、作家名の記載もお願いいたします。複数掲載の場合は、まとめて一か所でも結構です。

プロローグ 野十郎とはだれか

野十郎の回顧展が初めて開催されたのは昭和61(1986)年でした。それ以来、いくつかの展覧会や書籍で紹介されてきましたが、多くの人目に触れてきたわけではありません。そこで本章では、まず野十郎の全体像を概観します。



【3】《からすうり》
昭和10(1935)年 油彩・画布
福岡県立美術館蔵
からすうりは、月や蝋燭に並ぶ
野十郎作品を象徴するモチーフ。

【4】《ノートルダムとモンターニュ
通Ⅱ》昭和7(1932)年頃
油彩・画布 福岡県立美術館蔵
留学時代、ノートルダム寺院を望むア
パルトマンの窓からの風景を描いた作
品。パリでの拠点であったのだろう。



【5】《すいれんの池》昭和24(1949)年
油彩・画布 福岡県立美術館蔵
昭和55(1980)年、福岡県文化会館(現・
福岡県立美術館)での展覧会「近代洋画
と福岡県」に出品され、野十郎が“発見”さ
れるきっかけとなった作品。

第1章 時代とともに

野十郎は初期に3年ほど参加した小さな絵画グループ「黒牛会こくぎゅうかい」の他には美術団体に属さず、作品の発表は個展のみに徹していました。一方で彼の作品には、当時多くの日本の若い画家たちをひきつけたゴッホや、岸田劉生らによる美術団体「草土社」の影響がみられます。また、青木繁や坂本繁二郎などの同郷の画家たちとの交流も画業形成に寄与していると考えられます。

本章では、野十郎が写実の画風を確立させていく道程を、同時代の美術の中で捉え、「孤高の画家」と呼ばれる野十郎も、日本近代美術史に連なる画家の一人であることを紹介します。



【6】《静物》大正7(1918)年
油彩・画布 福岡県立美術館蔵



【7】《田園太陽》昭和31(1956)年
油彩・画布 個人蔵

第2章 人とともに

野十郎と長年交流のあった洋画家・大内田茂士おうちだしげしは野十郎について「人間ぎらいは相変わらずで、結婚もせずこのアトリエに一人住み、晴れれば畑で働き、降れば絵を描くという毎日であった」と書いています。

確かに、「黒牛会」と大内田を除くと画家との交わりはほとんどありませんでした。しかし野十郎は人を遠ざけていたわけではありません。彼は魅力ある人物だったようで、野十郎の絵を愛し、素朴で気骨ある生き方に共感する人たちが数多くいました。

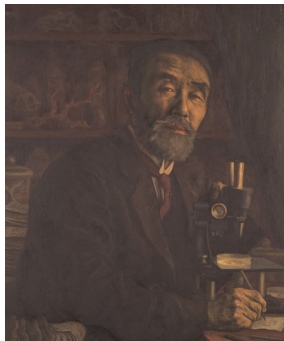
本章では、野十郎に魅せられた人たちが守ってきた作品とともに、彼らが捉えた野十郎の生身の姿を紹介します。



【9】《秋の花々》昭和28(1953)年
油彩・画布 個人蔵
雲仙岳と有明海の干潟を背景に秋の花々が
咲き誇る。知人を頼って福岡に長期滞在し
ていた際の作品で、個展に出品された後、大
学時代の友人の手に渡った。



【8】《蠟燭》大正時代(1912-26)
油彩・板 福岡県立美術館蔵
野十郎は生涯に渡って蠟燭を描いて
きた。それらは個展で発表されること
はなく、親しい友人やお世話になった
人へ贈られた。



【10】《岸上鎌吉先生像》
大正10年代(1921-26)頃 油彩・画布
東京大学大学院農学生命科学研究科水圏
生物科学専攻蔵
野十郎の東京帝大在学時の恩師を描いた
作品。柔和な表情や丁寧に描かれた研究
室の細部からは、師への敬愛と感謝の気
持ちを読み取ることができる。

※作品はすべて高島野十郎作。掲載の際は、作家名の記載もお願いいたします。複数掲載の場合は、まとめて一か所でも結構です。

第3章 風とともに

本章では、ヨーロッパ留学中の風景や、日本全国を旅して描いた四季の風景を紹介します。

野十郎は一人気ままに旅に出ては、気に入った場所に長期間滞在して絵を描きました。目に見える風景だけでなく、匂いも光も空気までも味わい尽くし、その経験すべてを1枚の絵に凝縮していたようです。



【11】《小さい停車場》昭和5（1930）年
油彩・画布（厚紙貼） 個人蔵
グラスゴーのビショップトン駅を描いた作品。現在も同じ建物が残る。野十郎はパリやロンドンのような大都会の街角よりも、本作のような田舎の何げない風景を好んで描いていた。



【12】《夏雲》昭和23-34（1948-59）年
油彩・画布 個人蔵

第4章 仏の心とともに

野十郎は、詩人で禅宗に帰依していた兄・^{うろう}宇朗の影響からか、青年時代から仏教に傾倒していました。「寫実の極致、やるせない人間の息づき——それを慈悲といふ」（高島野十郎「遺稿ノート」より）と述べ、対象を写實的に描くことを慈悲の實踐と捉えていた野十郎にとって、絵を描くことそのものが仏の教えに接近することでもありました。

本章では、野十郎が生涯よりどころとしていた広義での仏教をはじめ、広く宗教を予感させる作品を紹介します。



【13】《雨 法隆寺塔》
昭和40（1965）年
油彩・画布 個人蔵

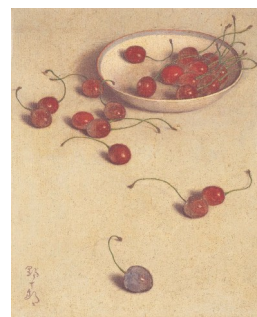


【14】《空》昭和23（1948）年以降
油彩・画布 個人蔵
本作の裏面には作品名とともに「色不異空 空不異色 色即是空 空即是色」という般若心経の一節が野十郎によって記されている。



【15】《割れた皿》
昭和23（1948）年以降 油彩・板
福岡県立美術館蔵

割れた皿、腐りかけて色が変わったさくらんぼ。形あるものはいつか失われ、命あるものはいつかは果てるといふ野十郎の思想を垣間見ることができる。



【16】《さくらんぼ》
昭和32（1957）年
油彩・画布（板貼） 個人蔵

エピローグ 野十郎とともに

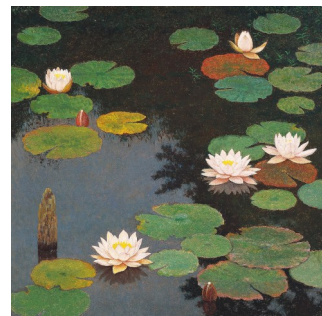
最後に、本展全体を振り返りながら、もう一度野十郎の作品をご覧ください。目の前のひとつひとつの作品を細部にいたるまで味わい尽くすことで、野十郎の眼差しや、絵描きとしての在り方を追体験することができるでしょう。



【17】《桃とすもも》昭和36（1961）年
油彩・画布 個人蔵



【18】《秋陽》昭和42（1967）年
油彩・画布 福岡県立美術館蔵



【19】《睡蓮》昭和50（1975）年
油彩・画布 福岡県立美術館蔵

「^{めいしやう}色の名稱をすてゝしまふ、色といふ言葉もすてゝしまふ、^{しゃじつ}寫実はそれからだ」高島野十郎「遺稿ノート」より

◇イベント情報◇

1. 記念対談

「生きている野十郎—この世に85年、あの世に50年」

日時：8月23日（日）午後3時—（約1時間30分） 地下2階ホール

登壇者：貝塚健氏（千葉県立美術館館長）

高山百合氏（福岡県立美術館学芸員）

*無料（要入館料）

*定員70名（要事前申込、応募者多数の場合は抽選）

2. 夏休み子ども美術教室

「観察スケッチに挑戦！お気に入りのものをじっくり見て描いてみよう」

身の回りのお気に入りのものを持参していただき、観察して描きます。うまく描けなくても大丈夫！いつも何気なく見ているものでも、じっくり観察すると新たな発見があるかもしれません。

日時：8月13日（木）、14日（金）午後2時—（約1時間30分—2時間）

地下2階ホール

講師：檜垣万里子氏（プロダクトデザイナー）

対象年齢：小・中学生（保護者同伴可）

*定員各回12名（要事前申込、応募者多数の場合は抽選）*無料

●締切（すべて必着）

1. 記念対談：7月21日（火）

2. 子ども美術教室：7月13日（月）

その他イベント

3. 学芸員によるミニ講座「渋谷と高島野十郎」

日時：7月19日（日）午前10時30分—（約1時間） 地下2階ホール

*無料（要入館料） *定員70名 *事前申込不要

4. 学芸員によるギャラリートーク

7月12日（日）、24日（金）、8月15日（土）

各日午前10時30分—（約40分）

*無料（要入館料）*事前申込不要

5. 館内建築ツアー

白井晟一設計の美術館建築を職員がご案内します。

7月10日（金）、17日（金）、24日（金）、31日（金）、

8月7日（金）、14日（金）、21日（金）、28日（金）、9月4日（金）

各日午後6時—（約40分）

*各回定員約20名 *無料（要入館料） *事前申込不要

◇次回展覧会のご案内◇

「路上、お邪魔ですか？」 9月19日（土）～ 11月23日（月・祝）

報道関係のお問い合わせ

広報担当（白石） pr-sma@shoto-museum.jp 電話：03-3465-9421 FAX：03-3460-6366

*画像をご希望の場合は、作品名の前にある番号をお知らせください。

*画像のご利用後、データは破棄してください。 *画像の使用は、本展のご紹介をいただける場合のみとさせていただきます。

*基本情報確認のため、一度校正をお送りください。*掲載後、見本誌をご送付くださいますようお願いいたします。

■ 1～2 イベント申込方法

往復はがきまたは当館ホームページ上の申込フォームにて承ります。1. 記念対談は1通につき1名まで、2. 子ども美術教室は1通につき2名までお申込み可能。応募者多数の場合は抽選となります。

● 往復はがき

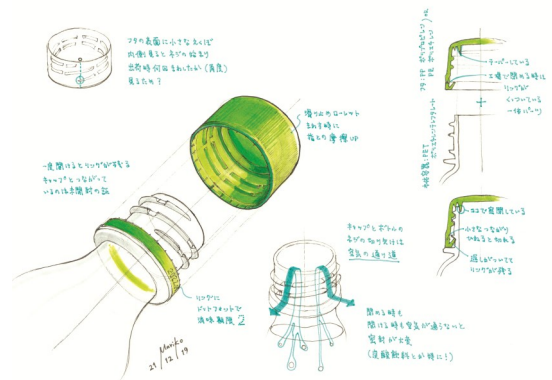
〒・住所・氏名（ふりがな）・日中連絡のつく電話番号・参加希望のイベントをご記入の上、野十郎展イベント係まで。2. 子ども美術教室にお申込みの方は、参加希望日及びお子様の学年もご記入ください。

● 申込フォーム

当館ホームページ上のイベントフォームからお申込みください。

※迷惑メール等の受信制限をされている方は、事前に当館からのメール「@shoto-museum.jp」が受信できるようにドメイン設定をお願いいたします。

※締め切り後、1週間以内に抽選結果が届かない場合はお問合せください。



2. 夏休み子ども美術教室 観察スケッチ例